

14世紀フィレンツェにおける「知恵」の図像解釈学

——ドミニコ会の美術にみる『知恵の書』を携えたトマス・アクィナス像の機能に着目して——

坂口万津子（慶應義塾大学）

本発表の核となる主題は「中世後期の神学者でありドミニコ会修道士であった聖トマス・アクィナス（1224/25-1274）とその神学、特に『知恵』と『位階』の概念が、14世紀イタリアのドミニコ会の美術にいかに視覚的に体系化され機能したか」である。本発表はドミニコ会のサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院集会室フレスコ壁画アンドレア・ディ・ボナイウート作《聖トマス・アクィナスの勝利と諸学問の寓意》（1366-1368年）に注目し、トマス・アクィナスが旧約聖書の『知恵の書』を携えた図像で表現された理由とその意義を考察する。

トマス・アクィナスは中世のドミニコ会を代表する神学者として、異端派を改宗させる説教者のために書かれた手引き書の性格を帯びる『対異教徒大全』や、パリ大学神学部教授に就任後、神学の初学者に向けて著した『神学大全』などの著書を手に持つ姿で描かれることが多い。にもかかわらず、当該作品では極めて例外的に旧約聖書の一部である『知恵の書』を手にした姿で描かれている。本発表ではこの『知恵の書』の導入が、ドミニコ会の単なる知的優越を示すだけでなく、「知恵」をめぐるドミニコ会的な体系を視覚的に確立するための中心的装置であった可能性を検討したい。即ち本図には、トマスがその神学の確立のために倣った、ギリシア教父ディオニュシオス・アレオパギテスの「位階的秩序」のもと、神の「知恵の賜物（*Sapientia Donum*）」がヴォールト部の《聖霊降臨》図から《聖トマス・アクィナスの勝利と諸学問の寓意》図のトマスを通じて地上に降下するという「真理の道」が描かれているという仮定をするのである。この「知恵」の図像解釈学に神学的側面から光をあてることで、14世紀イタリア美術が、個人の信仰と修道会の教育的・政治的使命の両方に多面向的に機能していたという、美術史的に重要な問題を再検討する。

従来、本作品については異端者反駁の文脈で、あるいは学問の体系化として多様な考察がなされてきた。本発表は、今まで言及が少ないのでなく十分に検討されてこなかった、トマスが『知恵の書』を持つという特異性に着目することで、その図像を「位階的秩序」と「知恵の賜物」という、より深く靈的なドミニコ会の神学プログラムとして再解釈することを試みる。まずトマスが携える『知恵の書』の図像的特異性を解釈し、その上で同図像をトマス・アクィナスによる聖書の区分論、およびディオニュシオス・アレオパギテスの『天上位階論』や『教会位階論』といったドミニコ会の採用した神学的・教育的文献と対照させる。これにより、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院集会室のフレスコ壁画が、フランシスコ会サンタ・クローチェ聖堂のバルディ・ディ・ヴェルニオ礼拝堂の壁画にみられる「感情的な救済」のプログラムとは対照的に、「恩寵の知的・位階的伝達」を視覚化していたことを図像解釈学と歴史的文脈のなかで明らかにする。